

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 顧夢麟『詩經說約』における朱公遷の興論の繼承と展開                                                                                                                                                                                         |
| Sub Title        | The inheritance and development of Zhu Gongqian's theory of 'xing' in Gu Menglin's Shijing Shuoyue                                                                                                                |
| Author           | 史, 甄陶(Shih, Chen-Tao)<br>種村, 和史(Tanemura, Kazufumi)                                                                                                                                                               |
| Publisher        | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会                                                                                                                                                                                                   |
| Publication year | 2025                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.40 (2025. ) ,p.225 (108)- 278 (55)                                                                                                                    |
| JaLC DOI         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            |                                                                                                                                                                                                                   |
| Genre            | Departmental Bulletin Paper                                                                                                                                                                                       |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20250630-0225">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20250630-0225</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 顧夢麟『詩經說約』における朱公遷の興論の繼承と展開

史甄陶（臺灣大學中國文學系） 著

種村 和史 譯

## 1 はじめに

本稿は、明・顧夢麟『詩經說約』<sup>〔1〕</sup>（以下、『說約』と略稱）において、六義の「興」の技法を用いた詩句表現（以下、『興體』と稱する）を解釋するためにいかなる方法が用いられ、いかなる特徴が見られるか、および元・朱公遷（生卒年不詳）『詩經疏義』（以下、『疏義』と略稱）といかなる關係を有するかを主に考察する。

顧夢麟、字は麟士、別號は織簾居士、江南の太倉（現江蘇省）雙鳳里の人である。明・神宗萬曆十三年（一五八五）三月十三日に生まれ、清・世祖順治十年（一六五三）十一月二十日に卒した。享年六十九歳である。彼の著作には『四書說約』二十卷、『詩經說約』二十八卷、『四書十一經通考』二十卷などがある。それらの多くは科擧に關係する著述であるけれども、やはり學術的價值を有するものである。清・朱彝尊（一六二九―一七〇九）『經義考』は呉周瑾の

説を引いて、「本書もまた科擧の受験生のための参考書であるが、しかし經典の意味を新たに解明したところがある（是書亦擧子兔園冊也、然於經義頗有發明<sup>③</sup>）」と言う。張壽林は、「おおむねみな南宋・朱熹（一一三〇～一二二〇）『詩集傳』（以下、『集傳』と略稱）を宗としつつ、毛公・鄭玄など諸家の説を折衷する。採用されている解釋を調べると、ただ『集傳』と『詩傳大全』の説を採って合わせて作られてはいるが、すこぶる入念に選擇調整を行っている。故にその議論はみな公平で穩やかで、學派的な偏見はなく、かつしばしば新しい説を立てている<sup>④</sup>。」と言う。劉毓慶は、顧夢麟を「漢宋雜採派」に分類し、かつ「朱（子學）を宗とし漢（學）を采る」、「朱説を以て主と爲し、朱説の通じ難き者は則ち漢説を采る<sup>⑤</sup>。」とする。以上の見解は、『説約』と漢學との繋がりをよく指摘している。その他、沙先一と介金嶸等は、『説約』と『集傳』との關係に注目し、とりわけ朱熹の賦比興説と韻讀等の問題を重視している<sup>⑥</sup>。同時に、『説約』と明代科擧との關係も學界の重視するところとなっている<sup>⑦</sup>。しかしながら、以上の研究においては『説約』と顧夢麟が最も重んじた朱公遷の『疏義』との關連については詳しい考察がなされていない。したがって『説約』は、なお引き續き追究すべき餘地が残されている。

顧夢麟が『説約』を撰述した動機と目的は、主に科擧受験生の便宜のためであった。明代の科擧においては明・胡廣（一三七〇～一四一八）『詩傳大全』が主とされた。明末の書院は、魏忠賢（一五六八～一六二七）による東林黨彈壓の影響を受けて大打撃を被り、ついに復興することなく終わった。崇禎帝は學校行政を重視し、朱熹の著作と『大全』を重んじて、奇怪ででたらめな説を廢棄するよう呼びかけた。これを承け、當時の士人は『大全』の不足を補おうとして、『大全』の名を冠した四書の注釋が相繼いで世に出たが、それらは『大全』改訂版と呼ぶべきものであった<sup>⑧</sup>。これらと同時期に、顧夢麟は『詩傳大全』の缺點を見て、『説約』を撰述したのである。

顧夢麟は『說約』の序文<sup>(9)</sup>において、次のような主旨の説明をしている——『四書大全』と元・倪士奇（一三〇三—一三四八）『四書集釋』との關係と同様、『詩傳大全』はもともと朱公遷の『詩經疏義』に基づいて編述されたものであるが、故意にそのことが隠匿された。ただ、『四書大全』が内容豊富で、讀者の需要を満たすものであったのに對して、『詩傳大全』（以下、誤解の恐れがない場合『大全』と略稱）の注解は簡略で、とりわけ朱公遷が比興を説明した部分を完全に削除してしまっている。そこで、顧夢麟は、『大全』の「初本」と彼が考える朱公遷の『疏義』に立ち戻る必要があると主張した。その上で、さらに毛傳・鄭箋・孔穎達『毛詩正義』、および歐陽脩『詩本義』・蘇轍『詩集傳』・嚴粲『詩緝』・呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』などの宋元以來の詩經學の重要注釋書を加え、同時に名物制度の解説を補充し、かつまた『尚書』『左傳』『三禮』『爾雅』『國語』などの經部や史部の著作の内容を加え、詩經の最良の注釋書を新たに編纂しようと試みたのである<sup>(10)</sup>。

以上からわかるように、顧夢麟が改めて『大全』を詳細に検討したのは、當時の朝廷の政策と關係しており、またそこには『大全』に對する彼の微妙な態度が反映されている。彼は一方では、胡廣が『大全』を撰述する際に朱公遷の比興論を削除したことに不満を抱いていたが、しかし一方では、彼は『大全』を決して全否定するのではなく、改めて修訂を行うという立場に立って、『疏義』を『大全』の初本として捉えたのである。そして、朱公遷の比興論に基づいて詩經を注釋し、そうすることで當時の科擧の需要に應じようとしたのである。

顧夢麟の著述は、明代の科擧に對して大きな影響力を發揮した<sup>(12)</sup>。さらにまた、彼の『說約』は日本の詩經學に對しても影響を與えた<sup>(13)</sup>。このことに鑑み、筆者は『說約』と朱公遷の「興」論との關係を中心に、以下の三つの面から考察を行いたい。

- (1) 顧夢麟の「興」論は、朱公遷の説からどのような影響を受けているか。
- (2) 顧夢麟は、朱公遷の考え方に賛同しない場合、どのような方法でその説に修正を加えたか。
- (3) 顧夢麟の「興」論の核心をなす観點とはいかなるものであるか。

## 2 朱公遷「興」論の受容

『大全』の來源が朱公遷の『疏義』であるという説は、明代後期から清代前期にかけて流行したが、顧夢麟は最も早くにこの説を唱えた學者の一人とすることが出来る。彼は『説約』において、『疏義』は朱氏公遷の著にして、『大全』の從ひ本づく所なり（疏義朱氏公遷著、大全所從本也）<sup>(14)</sup>とはつきり指摘する。つまり、『大全』は『疏義』に基づいて撰述され、兩著が密接な關係を有すると言うのである。ただし、彼はそのように判斷する根據について明確に説明していないため、この問題については今後のさらなる検討が必要である。<sup>(15)</sup>

一方で、顧夢麟自身も認識しているように、詩句の解釋において『疏義』と『大全』の間で明らかに説が異なり、しかもそれぞれが別箇の學説の繼承發展の脈絡を持つているものがあることも、また事實である。例えば、大雅「蕩」四章の、

不明爾德      爾の德を明らかにせざること

時無背無側      <sup>これ</sup>時 <sup>はい</sup>背無く側無ければなり

爾德不明      爾の德を明らかにせざること

以無陪無卿 陪ばい無く卿無きを以てなり

これらの句の解釋を、顧夢麟は「人無きに由りての故に明ならず、是れ責は輔弼に在るなり」と「明ならざるに由りての故に人無し、是れ責は舉錯に在るなり」という二種類にまとめ、それぞれについて歷代の詩經注釋の繼承關係を説明する。<sup>(17)</sup> 第一の解釋は、詩句が言わんとする重點は「王の前後左右の公卿陪臣たちは、誰も彼もが暴虐で苛斂誅求を事とし、一人として自己の官職にふさわしい人格の持ち主はいない（王之前後左右、公卿陪臣、皆暴虐聚斂之人而無一人稱其官者）」<sup>(18)</sup>、つまり王を補佐する忠良な家臣がいなくてということにあるというものである。この説は唐・孔穎達（五七四～六四八）『毛詩注疏』を源流とし、その後、南宋の呂祖謙（一一三七～一一八一）『呂氏家塾讀詩記』と嚴粲（生卒年不詳）『詩緝』、そして明代の『大全』が採用した。第二の解釋は、詩句が言わんとする重點は「混沌惑亂した君主は、是否の判斷を顛倒したために、このような行いをした（昏亂之君、是否顛倒、故其所爲如此）」<sup>(19)</sup>、つまり人を見る目を持った明君がいなくてということにあるというもので、朱公遷を嚆矢とし、いずれも明代の『詩經』注釋書である黃佐（一四九〇～一五六六）『詩經通解』（以下、『通解』と略稱）、徐光啓（一五六二～一六三三）『毛詩六帖講意』（以下、『講意』と略稱）、沈守正（一五七二～一六二三）『詩經說通』、陸化熙（萬曆四一年、一六一三、進士）『詩通』、そして何楷（天啓五年、一六二五、進士）『詩經世本古義』に影響を與えた。

このように分類をしていることから、顧夢麟が『大全』と『疏義』との間に學說上の違いが存在すると認識していたことがわかる。と同時に彼は、朱公遷が彼の先人とは異なる獨自の解釋を打ち出し、かつ明代の詩經學者に影響を與えたとも認識していたことになる。したがって、『疏義』が『大全』の底本であるという説を顧夢麟が唱えたこと

に關しては、實例に基づいてさらに整理すべき餘地がある。しかし、『説約』に收録された先人の注釋から考えると、顧夢麟は一方では『大全』の説を部分的に残しつつも、もう一方では『疏義』および上記の明代の詩經注釋書の説を増收している。後者はまさしく顧夢麟が獨自の態度で詩經研究に向かったことを表すもので、彼が朱公遷とその影響力を重視したことがわかる。

顧夢麟は朱公遷の比興論を重視したが、これを六義についての彼の認識の枠組みの中に置いてみると、その特殊性がいつそう明らかになる。唐・孔穎達は、六義が『周禮』「春官、大師」に言う「六詩」<sup>(21)</sup>と同じものであり、大師によつて管掌されると主張した。<sup>(21)</sup> 朱熹もこの認識を受容した。<sup>(22)</sup> すなわち、六義はもともと周の天子を補佐する官僚によつて定められたもので、高い地位と大きな権力を持つ編者の手によつて作られたと考えられたのである。ところが、顧夢麟は次のように考える。

興とか比とかいうものは、すべて後世の人間がそのように見なしたのであつて、詩篇の作者はこのような名目  
を自ら定めることなどはまったくしていない（興比皆是後人看出、作者全不自定名目）<sup>(23)</sup>

また、小雅「四月」の按語の中で次のように言う。

南宋・輔廣（生卒年不詳）（『詩童子問』小雅「四月」七章「匪鶉匪鳶、翰飛戾天。匪鱣匪鮪、潛逃于淵」の  
注釋〔に〕、「本章は本來はやはり興體ではあるが、しかしながら興として用いられる鳥や魚はあるけれども、そ

れらが興しているはずの内容を表す語が見られないので、興と稱するわけにはいかない。また、『匪（〜ではない）』という字が四つあるので、また比と稱するわけにもいかない。そこで朱熹『集傳』では『賦なり』と言うより他にしかたがなかったのである（此章本亦興體、但有所託之物而無所興之辭、故不可謂之興、又有四箇匪字、故亦不可謂之比、而只得以為賦也）<sup>(24)</sup>と言うのを見ると、六義とは、ある詩句が六義のどれに當たるか最初から定められていたわけではなく、すべて後世の人間が見なした結果だというのは、實にそのとおりである（觀輔注則六義非有一定之目、皆是後人看出、尤信）<sup>(24)</sup>

すなわち、彼は六義を周代の太師と關係付けることに賛同せず、またそれが作者の手によって定められたとも考えなかった。そうではなく、六義は後世の人間によって歸納され分類されたものだ<sup>(25)</sup>と、彼は考えるのである。そして顧夢麟は、後代の詩經注釋者の中で、朱公遷の説を最も高く評價した<sup>(25)</sup>。

顧夢麟が朱公遷を特に重視したのは主として、朱公遷が詩經の興體が成立する條件を、構造的見地から説明したことに<sup>(26)</sup>による。朱公遷による構造的説明のうち、最も綱領的な性質を持つ説明は周南「關雎」の注釋中に見られる。顧夢麟はこの朱公遷の説を引用して、朱熹の注釋の引用の後、かつ『朱子語類』の引用の前に置いた。このような配置から、興體か否かを判定する朱公遷の方法こそが、朱熹の興論を理解する鍵となるものと考えていたことがわかる。朱公遷の説は次のとおりである。

朱熹は、「凡そ興と言へる者は、文意皆な此に放ふ<sup>なま</sup>」<sup>(27)</sup>と言ひ、故に常にこの認識に基づいて興を判斷した。一



般的に興體には意味によつて相因るものと、語によつて相應するものがある。兩者を兼ねて、意味的に相因り、語としても相應じるケースは多く、意味的にも相因らず語としても相應しないケースというのはきわめて稀である。例えばこの「關雎」の首章では、「雎鳩という」動物が雌雄連れ合いになる様によつて、人間の夫婦が愛情に満ちているけれども夫婦の別を嚴格に守っている様を興して、意味的に相因っている。二章・三章では物事の當然あるべき理を興として、かつ上下呼應し合つて詩句を形成している。これがすなわち意味上も相因り語としても相應じるということである。興の中に見られる文脈の流れにも反と順との區別があり、そのパターンは一概には言えないので、それぞれの章で詳しく説明する（朱子謂凡言興者、文意皆放此、故嘗以此求之。凡興體有義相因者、有語相應者。相因相應兼備者多、義不相因而語又不相應者絶少。如此詩首章、以物之偶興人之偶摯而有別、義相因也。二章三章以事理當然爲興、而且上下呼喚成文、則義既相因而語又相應也。中間文勢、又有反順不同、其例不一、詳具各章<sup>(27)</sup>）

朱公遷は、興體が成立するための條件は、興句と應句とのニュアンス上の關連性の有無、および興句と應句との實詞あるいは虚詞の呼應關係の有無であると考える。つまり、内容的關連と形式的呼應の兩面を含み、そこに輕重の差はなく、平行關係にある。しかも、内容的には文脈上の順と反との違いがあると考えるのである。このように、彼の議論は興體の構造および詩句の脈絡に注意を拂っており、明確な體系性を有している。

それでは、顧夢麟は比興についてどのように認識していたであろうか。彼は、興と比との最も大きな違いは、興句と應句との間に「炤（照）の異體字（應）」があれば興であり、なければ比であると主張し、これが朱熹の考え方に

合致していると考え<sup>(28)</sup>。それでは、朱熹のどのような考え方と合致するというのであろうか。顧夢麟が引用している『朱子語類』に従えば、「昭應が有る」というのは、朱熹が「興とはある事物を別の事物に對應させて言うもので、上句で興によって詠い興し、下文で實際に言わんとする内容を詠う（興是以一箇物事貼一箇物事說、上文興而起、下文便接說實事）（譯者附記（以下同じ）——『朱子語類』卷八〇、詩一、綱領、中華書局排印本、第六冊、二〇六九頁）」と言うのを指す。そして、「昭應が無い」というのは、「比」というのは本題に入らないもので、例えば何かある事物を比喩として詠えば、それで實際に詠いたい内容を表現したことになるのである（比、則却不入題了。如比那一物說、便是說實事）（《同右》<sup>(29)</sup>）と言うのを指す。

興體の成立する條件である「昭應」については、顧夢麟は朱熹や朱公遷と同様に、「内容」と「形式」の二種類の對應關係を想定する。まず、内容的に照應するケースについて、小雅「南山有臺」三章の以下の詩句を例にして説明しよう。

|      |         |
|------|---------|
| 南山有杞 | 南山に杞有り  |
| 北山有李 | 北山に李有り  |
| 樂只君子 | 只の君子を樂す |
| 民之父母 | 民の父母なり  |
| 樂只君子 | 只の君子を樂す |
| 德音不已 | 德音 已まず  |

これについて、『大全』は「元の安成（譯者附記——安福か）の劉瑾氏は『本章は専らその徳を贊美している（安成劉氏曰、此章則專美其德也）』と言う」と注する。<sup>(30)</sup>一方、朱公遷は「三章は前（の「民の父母なり」の句）で贊美し、後（の「德音 已ます」の句）で祈る（三章以前美而後祝<sup>(31)</sup>）」と解釋している。それは、「南山有杞」と「北山有李」とは互文（すなわち二句の語句が互いに組み合わせられて一續きの意味を形成する修辭法。本例で言えば、南山にも北山にも杞と李が生えているということを二つの句に語を配當して表現したもの）であるので、應句も「其の徳を美む」と「其の壽を祝<sup>(い)</sup>る」と言うように、互文として解釋する（二つの部分に分けて説明するが、結局は「君子の徳を贊美し、その長壽を祈る」と一續きの意味として理解する）必要があると考えたためである。（つまり、『大全』は朱公遷の説に従わず、元・劉瑾（生卒年不詳）『詩傳通釋』の説に従っているのである。）

この問題に對して、顧夢麟は按語を付して次のように言う。

私が考えるに、この「德音 已ます」の句にも「彼が長壽を得られんことを」と祈る氣持ちが込められている。もし劉瑾の「本章は専ら彼の徳を贊美している」という説に従うならば、『疏義』が言う二つの興の理論を説明できなくなってしまう。おおむね『疏義』の解釋は、私の説とみな秘かに合致している。『大全』が『疏義』の説の多くを削除したのは、間違ひである（麟按、如是德音不已、亦可見壽意。若依劉氏、此章專美其德、則疏義兩興之理難說。大約疏義解、余皆與闕合。大全多妄之者、非也<sup>(32)</sup>）

彼の認識は朱公遷と合致し、興句と應句がいずれも互文であり、かつ上下相應していると主張し、『大全』が劉瑾の説に従って、朱公遷の「兩興の理」を削除したことを批判している。ここから顧夢麟が朱公遷の解釋の方法と内容とを受容していることがわかる。

この他に、顧夢麟は詩句のニュアンスを解釋する際に、とりわけ上句と下句との繋がり方が「正」の關係か「反」の關係かを重視している。興のスタイルから言えば、「正興」とは興句と應句とで表現する情感の方向性が一致していて違いないことを指し、「反興」とは興句と應句が表す情感が互いに對立關係にあり、明らかな差異があることを指す。顧夢麟がこれを重視したのも、やはり朱公遷の影響を受けたものである。<sup>(34)</sup>「四月」二章の次の詩句を例にして考えてみよう。

秋日淒淒 秋日 淒淒たり

百卉具腓 百卉 具な腓れぬ

亂離瘼矣 亂ありて離へ瘼むときに

爰其適歸 爰く其れ適き歸らん

顧夢麟は『疏義』に據れば、本詩のうち第二章のみが正興である（據疏義則此詩惟第二章正興<sup>(35)</sup>）<sup>(36)</sup>と言い、朱公遷の解釋を引用して次のように言う。

『疏義』に次のように言う——厳しく冷たい態度で威力を振るつたならば、萬物はみな免れることができない。世が亂れ人々が散り散りばらばらになるような危害を受けたならば、いずこに行こうとも身を安んずることはできない。植物はみなそのように病み萎れてしまっているし、どこに行っても疲弊した人民で溢れている。亂世の氣象は萬物が凋落する秋と同じであるので、秋の景色によって興を起こした（疏義肅殺用威、則何物可免。亂離爲害、則何處可安。草木之病者皆然、人民見病者隨地而然也。亂世之氣象與秋之凋療同、故以起興<sup>(36)</sup>）

注釋中、「同」の字を用いることによって、秋に木の葉が枯れ落ちる風景と亂世に人民が離散し疲れ苦しむ様子とが、その文勢を同じくしていることを指摘している。故にこれは「正興」なのである。

「反興」については、小雅「四月」四章の次の詩句が例になる。

|      |                                   |
|------|-----------------------------------|
| 山有嘉卉 | 山に嘉卉有り                            |
| 侯栗侯梅 | 侯 <sup>ニ</sup> 栗 侯 <sup>ニ</sup> 梅 |
| 廢爲殘賊 | 廢 <sup>ナク</sup> ふて殘賊を爲す           |
| 莫知其尤 | 其の尤を知る莫し                          |

顧夢麟の注は、『疏義』の以下の文章を引用している。

物の美というのは、その素晴らしさは餘すことなく發揮されるものなので知ることがたやすい。ところが、人の善の方とは言えば、なんと變化して悪になってしまうので、理解することができない。物の性は常に變わりないが、人の性には常がない。これは人が物に及ばないことによって興を起こしている（物之美者能全其美、可見也。人之善者乃變而惡、不可知也。物性有常、人性無常、此以人不如物起興也<sup>(37)</sup>）

すなわち、詩人は「物」が缺けるところなく美しく常に變わらないことの對比として、人間の性が善から惡へと變わってしまう常無き様を見て取り、そこから「人は物に及ばない」という感慨を發したと、朱公遷は言うのである。顧夢麟は、さらにそこから一步進めて解釋する。

私が考えるには、『疏義』の説に據るならば、物の不變によつて人の變を浮かび上がらせ、物の理解しやすさによつて人の理解しがたさを浮かび上がらせている。變不變と可知不可知の二つの意味は互いに關聯し合っているけれども、しかしながら變の意味の方に、より重心が置かれている（麟按、如上說、以不變炤變、可知炤不可知、兩意雙關、然變爲意較<sup>(38)</sup>重）

ここには、雙關語という視點から、興句と應句とが「不變」と「變」、「可知」と「不可知」という文脈的に反對の、二層の對照を持つてゐることを説明し、さらに細密に分析している。しかも、本詩の末尾で、顧夢麟は次のように總括する。

『疏義』に據れば、本詩はただ第二章のみが正興で、首章、三、四、五、六章はみな反興である（據疏義則此詩惟第二章正興、一章、三章、四章、五章、六章俱反興也<sup>39</sup>）

ここからわかるように、顧夢麟が用いる「正興」とか「反興」という語彙は彼自身が作り出したものであるが、その概念は朱公遷から受け継がれたものである。

次に、「形式」上「炤應」するケースについて考えてみたい。朱公遷は、虚詞による呼應を興と考えるべきだと特に強調したが、顧夢麟もやはりこれを重視した。鄭風「野有蔓草」首章を例とする。

野有蔓草 野に蔓草有り

零露漙漙 零露 漙漙<sup>たんたん</sup>たり

有美一人 美なる一人有り

清揚婉兮 清揚 婉たり

邂逅相遇 邂逅<sup>たいごう</sup>にして相遇はば

適我願兮 我が願ひに適<sup>あた</sup>らん

『大全』はただ朱熹『集傳』の内容を引用するだけで、その他の注釋は列舉しない。それに對して、顧夢麟は朱熹

の注解の後に、朱公遷の注釋を引用して、「『疏義』に、『もともと詩人が身を置いている場面に基づいて、この句を賦し、さらにその「有り」という」語を用いて「興句と應句とを」呼應させた』とある（疏義、本即所在而賦之、又用其語相呼也<sup>(10)</sup>）」と言い、さらに、顧夢麟自身の見解を付け加えて次のように言う。

私が考えるに、『大全』は全篇『疏義』に基づいて著された書物である。それにもかかわらず、『疏義』が六義について述べた個所を、常に削除して載せていないのは、まったく笑うべきことである（麟按、大全皆本疏義者也、然於言六義處、每芟而不載、可笑<sup>(11)</sup>）

つまり顧夢麟は、朱公遷が本詩「野に蔓草有り」と「美なる一人有り」の二句の「有り」という語が呼應して、兩句が興句と應句の關係であることを示していると説明したのに、この部分を『大全』が削除したと考えて、それ故に『說約』の中で特に朱公遷の説を引用したのである。

この他、顧夢麟は朱公遷の考え方を、彼自身が詩經の興體を判斷する方法として應用してもいる。小雅「車輶」四章の、

陟彼高岡 彼の高岡に陟<sup>(12)</sup>り

析其柞薪 其の柞薪を析<sup>(13)</sup>く

析其柞薪 其の柞薪を析かんことは



其葉滑兮 其の葉 滑しよたればなり

鮮我覲爾 鮮よきかな 我 爾なんぢに覲あひては

我心寫兮 我が心 寫うつりなん

では、彼は朱公遷の注を引用するだけではなく、さらに按語を加えて次のように言う。

私が考えるに、『集傳』の「本章の注に「陟岡而析薪則其葉滑兮矣。我得見爾則我心寫兮矣」と言い「而」と「則」の字「を用いて詩句の脈絡を説明しているところ」がある。つまり、前半四句で後半二句を興しているのである。ということは、興句の意味の脈絡の中にさらに一つの轉折があるということ、これもさらなる一つのスタイルである。『疏義』は、その説明が周到で素晴らしいが、残念なことに『大全』は載せていない。「薪」は音「襄」で「岡」と押韻する。「寫」は想羽の反で「滑」と押韻する。○細かに詩句を吟味すると、また「其」字、「我」字を呼應させて興としている（麟按、集傳而・則字、是以四句興二句、而就興意中又作一轉折、另一體也。疏義周旋頗妙、恨大全不載。薪、音襄、與岡叶。寫、想羽反、與滑叶。○細玩亦以其字・我字相呼爲興）

顧夢麟は、朱熹が注釋中で用いた轉折の助詞から本詩の興體の範圍を判定して、前半四句を興句、後半二句を應句とした。彼は、朱公遷の説明も重視すべきものであると考え、それにも關わらず『大全』によって削除されたことを惜しんでいる。しかしながらより重要なことは、顧夢麟が、本章の興句の「其」の字と應句の「我」の字とが相呼應

していると考えていることで、ここには朱公遷が輿體を判斷するのに用いた方法が取り入れられている。

實詞の對應關係については、秦風「車鄰」二章、

阪有漆 阪に漆有り

隰有栗 隰に栗有り

既見君子 既に君子を見れば

竝坐鼓瑟 竝ならび坐ゐて瑟を鼓す

今者不樂 今者いま樂しまざれば

逝者其耄 逝ゆく者ひと 其れ耄をひなん

を注して、顧夢麟は「『漆』と『栗』によって『瑟を鼓す』を興する。詰まるところ實詞どうしを對應させたのである（以漆・栗興鼓瑟、畢竟實字相應）」と強調する。

また、小雅「車辚」五章の、

高山仰止 高山をば仰がん

景行行止 景行をば行はん

四牡騤騤 四牡 騤ひひ騤ひひたり

六轡如琴 六轡 琴の如し

靚爾新昏 爾の新昏に靚あふては

以慰我心 以て我が心を慰やすんじてん

を注釋して、顧夢麟は前半二句が興句、後半四句が應句と捉える。これは主に、朱熹が本詩本章『集傳』で「高い山ならば仰ぎ見ることができ、景行（大きな道）であれば進むことができる。馬が從順で御者が優れているならば末娘を迎えに行つて我が心を慰めることができる（高山則可仰、景行則可行。馬服御良、則可以迎季女而慰我心也）」と、三つの「則ち」の字を用いて訓釋していることを根據として、興體の範圍を確定したのである（譯者附記——朱熹は本章上二句が興句であると捉え、かつそれぞれが條件結論からなる句構造をとっていることを「高山なれば則ち仰ぐべく」と「景行なれば則ち行くべし」と條件と結論の關係の句を繋ぐ働きを持つ副詞である「則ち」の語を用いて注することです。應句については、「四牡 駢駢ひひたり」「六轡 琴の如し」の二句をまとめて「馬は從順に命令に従い、御車は技術が優れているならば」と條件節として捉えて解釋した上で、「爾の新昏に靚あふては、以て我が心を慰やすんじてん」がその結果節であることを、「則ち」の語を用いて示した。しかしながら、興句と應句がどのように照應しているかについては、朱熹は明確な説明を行わなかった。それに對して顧夢麟は、本章で照應關係があるのは前半の四句の間、すなわち興句は第一句の「高山」と第二句の「景行」が應句第三句の「四牡駢駢」と第四句の「六轡如琴」とにそれぞれ對應しているのだと説明を加えている。この説明では、明らかに興句と應句とが實詞によって照應していることになる。<sup>(46)</sup>

以上に考察したように、朱熹は「興」を詩經の作者がその情感を表現するために用いた創作手法の一つと考えている。しかしながら、朱熹が「周南「關雎」の注の中で「興」を定義して」「まず他の物を表現して、それによって詩人自身が本来詠いたかった言葉を導き出す（先言它物以引起所詠之詞）」と言った興體とは、どのように解釋したらよいのだろうか。この問いに對して、朱公遷は「義相因る」と「語相應ず」という二つの側面から答えた。彼は詩經の興體の詩における文脈の流れと詩句の構造、言い換えれば、詩經の興句と應句との言語的體系性に注目し、それを議論の枠組みとした。形式と内容といった面から詩人の心理的活動のありさまを説明したのである。そして、顧夢麟の「炤應」説は、朱公遷の學説と構造的に相似ている。彼はその『說約』の中で、朱公遷の經説を大量に引用して、その詩經注釋としての地位を高く評價した<sup>(47)</sup>だけではなく、同時に「互文」や「雙關」などといった創作技法によって詩經の意味内容を説明することで、朱公遷の學説をより積極的に展開したのである。故に、顧夢麟が朱公遷をとりわけ強調した理由は、主に朱公遷の體系的な文學的視點を浮かび上げようとしたためであると、筆者は考える。すなわちいかにして、詩經の詩篇がどのような規則で作られているかを考察することを通して興體の特徴を把握し、詩經の詩篇の意味を解釋するための出發點とするかという問題意識である。このポイントを強調するために、顧夢麟は朱公遷の『疏義』が『大全』の「初本」であると主張することによって、『疏義』の重要性を際立たせたのである。そこからさらに一步を進めて、時代の要求に應える科擧のための經書の注本、すなわち『說約』を編纂し、それと同時に『大全』の至らなさを批判したのである。

しかしながら、さらにもう一點注意すべきことがある。それは顧夢麟が、詩の六義とは後世の注釋者によって考え出されたものであると明確に主張したことである。これは、朱熹と朱公遷が詩篇の作者の立場から六義を説明し解釋

を行ったとは異なる。さらには、顧夢麟による詩經の興體の體系性に対する説明は、朱公遷の認識をまったく祖述したものというわけでは決してなく、そこには朱公遷独自の觀點がある。次節でこの問題を考察したい。

### 3 朱公遷の經說を修正する方法

顧夢麟は、興體の成立条件を考察する際には主に朱公遷の認識を繼承したが、詩篇の意味を讀解する上では、朱公遷の解釋とまったく同じというわけではなかった。兩者の說の違いは以下の二つの状況で最も多く見られる。第一に、興體の詩句の文脈の流れについての判斷に違いが見られるケースである。すなわち、「正興」であるか「反興」であるかの認識の差異である。第二に、興體において興句と應句とが意味的に關連性を有するか否かについて、見解の違いが見られるケースである。すなわち、義を取る興か、義を取らざる興かという、興體における判斷の違いである。そのような場合、顧夢麟が朱公遷の解釋を修正するために主に用いたのは、詩經のテキストと朱熹の『集傳』に立ち戻り、詩經の興體の範圍を改めて確定し直すことによって詩意を解釋するという方法である。以下にこの問題について説明したい。

#### ① 詩經のテキストを根據とする方法

顧夢麟は詩經のテキストに基づいて、改めて詩篇の意味内容を解釋し、それとともに興體の正と反、および義を取る興か取らざる興かを確定した。これが朱公遷の考え方を修正する際に用いた第一の類型である。例えば、小雅「青

蠅」二章の、

營營青蠅 營營たる青蠅

止於棘 棘に止よ

讒人罔極 讒人 極む罔し

交亂四國 交るがわる四國を亂る

の解釋について、彼は朱公遷の考えに賛同しなかった。彼は次のように言う。

私が考えるに、『疏義』は「青蠅は止まるところがあるのに、讒言するものの方は窮まることがないということである。これは興句の意味を反轉させて興としている例である」と言う。しかしながら、これでは「交るがわる四國を亂る」という句が無視されてしまうことになる。「營營たる青蠅」が順接的に「讒人極むこと罔し」を興し、「棘に止まる」が順接的に「交るがわる四國を亂る」を興すると解釋するのがよい（麟按、疏義、青蠅有所止、讒人則無極、此反其意以爲興。然如此則遺了交亂四國一句、宜以營營青蠅正興讒人罔極、止于棘正興交亂四國也）

もし朱公遷の解釋に従うならば、本章は「反興」に屬し、かつ興體の範圍は「營營青蠅、止於棘」が興句、「讒人

「岡極」が應句」と第三句までとなる。解釋の鍵は「止」の字である。すなわち、アオバエは止まるところがあるが、讒言する者は止まるところがない、ということになる。一方、顧夢麟は章全體が興體の範圍にあると主張した。その中の興句中の飛び回るアオバエと應句中の他人を陥れようと讒言する者とが正興（順接的な興）、アオバエが棘の木に止まることと讒言する者が四方の諸侯を搔き亂すこともまた正興となる。ここからわかるように、詩章の興體の範圍が詩句の文脈の流れと意味の解釋とを決定づけることになる。

また、例えば邶風「雄雉」二章の、

雄雉于飛 雄雉 于<sup>ゆ</sup>き飛ぶ

下上其音 其の音を下上す

展矣君子 展<sup>まじ</sup>なるかな君子

實勞我心 實<sup>まじ</sup>に我が心を勞せしむ

について、顧夢麟は次のように言う。

私が考えるに、夫を思つて心を疲れさせるまでになり、また夫がキジのように満ち足りて悠然として暮らすことができないことを思うのである。逆説的に照應している個所が詩句のうちに隠されていて、しかも雄雉の「雄」の字にやはり作者の意圖がやや込められている。『疏義』と黄佐『通解』はいずれも、自分が夫を思つて心を疲

れさせていることを興すると言うが、従い難い。「展矣」以下の二句は一氣に讀むべきである。「展矣」は心を勞すにかかっている。「展矣君子」四字だけで意味を解釋してはいけない（麟按、思君子而至於勞心、亦是感君子之不能自得如雉也。反炤處俱埋伏在內、且雄雉雄字亦稍有意。疏義・通解俱云、興已之思念勞心、不可從。展矣二句、作一氣讀。展矣亦綰到勞心、不可四字讀住<sup>(4)</sup>）

顧夢麟は、朱公遷と黃佐とが「實に我が心を勞せしむ」の重點を婦人が夫を思うあまり心を疲れさせるところに置いたのに反對した。彼の見るところ、この章の興句と應句の「反炤」はすでに詩句の中に埋め込まれているのであって、とりわけ「雄」の字が「君子」と呼應していて、そこに深い意味も込められている。故に、彼は「展かな君子、實に我が心を勞せしむ」の二句は一續きに詠まなければならないのであって、そうすることではじめて、婦人が心を疲れさせている内容——夫が外地で勞役に服していることに對する感慨がはつきりと浮かび上がってくるのである。そしてこの感慨が興句が描寫する雄雉が上から下、下から上へと自由氣儘に飛びまわっている様子とコントラストを成し、そのようにして「反興」が構成されるのである。ここに見られるように、顧夢麟は興句と應句の關係が正か反かの判斷は、詩經のテキストを手掛かりに行っており、完全に朱公遷の考えに基づいているわけではない。

この他に、顧夢麟はまた、詩經のテキストを根據として、朱公遷が「義を取る無きの興」と判斷した詩句を、「義を取るの興」に改めることによって、直接詩人の思考と感情を讀み解いた例もある。鄭風「蓍兮」首章を例にする。



蕓兮蕓兮 蕓たり蕓たり

風其吹女 風其れ女なんぢを吹く

叔兮伯兮 叔や伯や

倡予和女 倡せば予 女に和せん

これについて、朱公遷は「これは専ら語句を對應させて興としたものである（此專以語相應爲興）<sup>(50)</sup>」、すなわち「義を取る無きの興」と考えた。それに對して、顧夢麟は異なつた説を立てて、次のように言う。

『通解』も朱公遷の説に従う。しかしながら、これを事柄と論理が對應していると考えても問題ない。思うに、「蕓（枯れている）」が故にこれを吹くのであり、「倡」するがゆえにこれに和するのである。意味的關係がないわけではない（通解從之。然作以事理相應未嘗不當也。蓋蕓、故吹之。倡、故和之。非爲無義耳<sup>(51)</sup>）

つまり顧夢麟は、兩句の「事理」の照應から、詩人が伝えようとした言外の意が浮かび上がると考えるのである。また例えば、齊風「東方之日」首章を見よう。

東方之日兮 東方の日あり

彼姝者子 彼の姝たるは子なり

在我室兮

我が室に在り

在我室兮

我が室に在り

履我即兮

履<sup>り</sup>せば我<sup>つ</sup>即かん

これについて朱公遷は、「詩中の興で、語としても照應していないし、意味上も照應していない例は、本詩に見えるのが始めである（詩中之興、語不相應、義不相因者、始見於此<sup>(52)</sup>）」と主張するが、顧夢麟はこれに對しても修正を加えて次のように言う。

私が考えるに、これは詩人がみずから見たものに因んで興を起こしたのである。東方には何があるかと言えは日があり、かの美しい人はどこにいるかと言えは私の居室にいるということ、やはり興句と應句が事柄もまったく關連していないと言うわけではなく、語としてもまったく照應していないと言うわけでもない。『疏義』の説は誤りである（麟按、此因其所見以起興也。東方則有日、彼姝則在我之室、亦不謂事全不相因、語全不相應。疏義說非<sup>(53)</sup>是）

朱公遷の解釋に従うならば、この詩は興體に屬してはいるが、文字と内容はともに對應しておらず、解釋上特例に屬する。しかし、顧夢麟は朱公遷の解釋に同意せず、興句と應句の間には照應關係がやはりあると考え、さらに朱熹をまねて、二つの「則」の字を用いて二句の關聯性を説明し、それによって朱公遷の論點の缺陷を補っている。

## ② 朱熹の注解を手掛かりとして

顧夢麟は、詩人の意を把握する際には朱熹の見方を優先した。邶風「簡兮」四章の、

山有榛

山に榛有り

隰有苓

隰に苓さば有り

云誰之思

云に誰をか之れ思ふ

西方美人

西方の美人を

彼美人兮

彼の美人は

西方之人兮

西方の人なり

について、顧夢麟は次のように言う。

私が考えるに、榛は山にあるもので、苓は澤にあるものである。西方の美人は、我が思いの内にあるものである。もともとこれは「正興」である。『疏義』に、「〔榛や苓のように山や澤に〕あるものによって、ここにいない人を興する」と言うのは誤りである。朱公遷は恐らく、「〔云に誰をか之れ思ふ、西方の美人を〕に」後の「〔彼の美人は、西方の人なり〕の」二句を續けて全體を應句として解釋したのであろうが、彼は興の意味は第四句までで終わっていることに氣付かなかったのである。「彼の美人は、西方の人なり」の二句は興句・應句とは別に

加えられたもので、興とは別箇の内容である。故に『集傳』は「さらに『西方の人』と言うのは、其の人のいるところが遠くて姿を見ることができないのを歎いた言葉である」と言ったのである。「西方美人、彼美人兮、西方之人兮」と三句を繋げて詠じたのではないのである（麟按、榛者山之所有。蒼者隰之所有。西方美人則我思之所有也。本是正興。疏義、以彼所有之物、興此所無之人。非是。彼蓋連後兩句立說耳、不知興意只至四句便止。彼美人、西方之人兮二句另起、是興外之意。故集傳曰、又曰西方之人者、歎其遠而不得見之辭也。未三句連<sup>(54)</sup>）

顧夢麟は、本詩四章は「正興」なのであって、朱公遷が言うような「反興」ではないと主張する。兩者の説の違いは、主に興體の範圍をどのようにに認定するかの違いから生じている。朱公遷が本章全体を興として捉えるのに對して、顧夢麟は興は「云誰之思、西方美人」の二句までで終わり、「西方美人、彼美人兮、西方之人兮」の三句が繋がっているわけではないと考える。彼がするように判斷する根據は、朱熹『集傳』の注釋中に「又た曰く」と言つて、前の詩句と切り離して「彼美人兮、西方之人兮」についての説明を加えていることから、この二句が興體の中には含まれないと判斷したのである。

さらに注意すべきことがある。それは、顧夢麟が興體の範圍を判斷する時に、とりわけ朱熹の注釋に虛字がどのようにに用いられているかに注目して詩篇の文脈の流れと興體の範圍を判斷していることである。周南「關雎」首章の朱熹の注解の傍らに、顧夢麟は一行の小字を書き加えて次のように言う。

およそ『集傳』は「正興」を注する時には「則」の字を用いることが多く、「反興」を注する時には「猶」や「乃」

の字を用いることが多い（凡集傳于正興、多用則字、于反興、多用猶字、乃字<sup>(56)</sup>）

顧夢麟が見るところ、朱熹が注釋の中で「則」の字を使うのは「正興」であるという目印である。例えば、周南「關雎」首章の朱熹の注解に「あのカンカンと鳴くミサゴはと言えば川の中洲の上で仲良く鳴き交わし、このひっそりと淑やかな淑女はと言えば君子のよき連れ合いになんとふさわしいことではないか（言彼關關然之雎鳩則相與和鳴於河洲之上矣、此窈窕之淑女則豈非君子之善匹乎<sup>(57)</sup>）」と、前後の二句に用いられた「則」字は興句と應句が順接的な意味關係であることを説明するためのものである。

一方、「反興」の例としては、鄘風「相鼠」首章「鼠を相れば皮有り、人にして儀無からんや（相鼠有皮、人而無儀）」の朱熹の注釋に、「あの鼠を見ると、それでもなお必ず皮を持っている、人であるというのに禮義がなくてどうしてすまされようか（言視彼鼠、而猶必有皮、可以人而無儀乎<sup>(58)</sup>）」と言う。この「猶」の字が興句と應句との間の逆接的意味關係を表している。

これと同時に、顧夢麟は朱熹の虚詞の使用状況を捉えて、興體の範圍を判斷する手掛かりとしている。唐風「山有樞」首章の、

山有樞

山に樞有り

隰有榆

隰<sup>さば</sup>に榆<sup>ゆ</sup>有り

子有衣裳

子 衣裳有り

弗曳弗婁 曳えひぜず婁ろうぜず

子有車馬 子 車馬有り

弗馳弗驅 馳ちぜず驅くぜず

宛其死矣 宛として其れ死なば

他人是愉 他人 是れ愉たのしまん

について、顧夢麟の解釋は、

私が考えるに、『大全』に朱熹の〔『朱子語類』卷八十、詩一、論讀詩の〕言葉を用いて、「詩經の詩が人の思いを奮い起こさせることのできる力の源はまったく興にある。例えば、『山に樞有り、隰に榆有り』と言うのは、取り立てて意味があるわけではなく、ただ下の『子に車馬有り』、『子に衣裳有り』を興して引き起こす役割をしているだけである」と言う（中華書局排印本、第六冊二〇八四頁）。『疏義』はまた、「本例でも興句と應句の『有』の字が相呼應している」と言う。しかしながら、『集傳』が〔故に言ふ、山には則ち樞有り、隰には則ち榆有り。子には衣裳車馬有るも、而るに服きず乗らずんば、則ち一旦宛然として以て死せば、而して它人之を取りて以て己の樂しむと爲さん（故言山則有樞矣、隰則有榆矣、子有衣裳車馬、而不服不乘、則一旦宛然以死、而他人取之以爲己樂矣）と〕三箇の「則」の字を用いていることに照らして考えるならば、本詩は興が最後の句まで一貫して働いているのであり、他の詩とは異なる。陸聚岡は、「山や澤に生える物によって、人は樂しまなくてはだめ

だということを興する」と言う。このように理解することで、本詩の言葉の意味はようやく完全に効いてくる（麟按、大全朱子曰、詩所以能興起人處全在興。如山有樞、隰有榆、別無意義、只是興起下面子有車馬、子有衣裳耳。疏義亦曰、此亦有字相呼爲興。然炤集傳三則字、卽此詩直興到底、與它處不同。聚岡曰、以山隰之所有、興人不可不樂。其所有語意方完也<sup>(59)</sup>）

『朱子語類』の中で、朱熹は唐風「山有樞」の興には「別に意義無し」とあつさりと言う。朱公遷はさらに一歩進めて、「有」字が興句と應句が呼應する條件となっていて、やはり「義を取る無し」と強調する。しかし顧夢麟は、朱熹が「集傳」の注釋の中で三つの「則」の字を用いているので、本詩は全篇みな興體に屬すると考えていて、『語類』の説と異なることに注意している。またさらに、陸聚岡の説を採用して、本詩は時節を逃さず外に出かけて行樂するという意味を傳えているので、「義を取る無し」というわけではないと強調している。

「反興」に對する判斷についても、顧夢麟はやはり朱熹の虚字に依據している。例えば、唐風「杕杜」首章中、顧夢麟は本章の興體の範圍を「杕たるの杜有り、其の葉滑滑<sup>しじょ</sup>たり、獨り行くこと蹢躅<sup>く</sup>たり（有杕之杜、其葉滑滑、獨行蹢躅）」までと限定する。彼は次のように説明する。

これは反興で、第三句までで終わる。二句で一句を興していて、これも一つのスタイルである。「杕（一本だけ立つ）」字が「獨（一人きり）」字に照應しているのは正興のように見えるが、「滑滑（盛んに生い茂る様）」が「蹢躅（親しむべき相手がいない様）」に照應しているのから考えると反興ということになる。故に、『集傳』で

は「一本だけ生えている杜の木は、それでもその葉は盛んに生い茂っている。それに對して、人間で兄弟がいない者はと言うと、一人きりであてどもなく歩き、杜にさえ及ばないということを言っている（言杖然之杜、其葉猶滑滑然。而人無兄弟、則獨行蹢躅、曾杜之不如矣）」と、「葉については「猶（それでもやはり）」の字を使い、人については「則（こちらの方は）」の字を使い、文脈の違いを區別したのである（此反興也、至第三句止。以兩句興一句、又一體也。杖字炤炤字似正、而滑滑炤蹢躅則反、故注以猶字・則字別之<sup>(9)</sup>）。

本章の興體のスタイルは「二句の興句で一句の應句を興す」ものであるが、興體が成立する條件は「杖」と「獨」という實字間と「滑滑」「蹢躅」という疊語間それぞれの呼應關係に據る。しかし「滑滑」と「蹢躅」はいずれも状態を描寫する語で、正興なのか反興なのか容易に判斷はできない。そこで、顧夢麟は朱熹の注釋の中の「猶」と「則」の字を賴りにして、これが反興だと判定したのである。

また、召南「江有汜」首章の、

江有汜 江に汜有り

之子歸 之の子歸ぐ

不我以 我と以にせず

不我以 我と以にせずして

其後也悔 其れ後に悔ゆ



について、顧夢麟は大畧以下のような説を述べる——本詩の興體の範圍について、黃佐『通解』は「第一句が下の四句を興する（首一句興下四句）」と考えるが、顧夢麟は朱熹『集傳』の「本詩首章の通釋で、「言わんとするのは、長江でさえなお本流から分岐した後、再び本流に流れ入る支流があるというのに、この姫君はよその國に嫁いで行くのに、何と私をお供に加えてはくださらない、ということである（言江猶有汜、而之子之歸、乃不我以）」と言う中の「猶」と「乃」字を根據に、これが反興であり、かつ興體の範圍は第三句までと判斷する。これからわかるように、顧夢麟は朱熹の注釋で用いられる虚字によって、興體の範圍とその正か反かを判斷し、そこから進んで詩人の意を把握するのである。<sup>(91)</sup>

この他、顧夢麟は詩篇の主旨についての朱熹の説を根據にして、朱公遷の説を修正することもしている。鄭風「山有扶蘇」首章の、

山有扶蘇 山には扶蘇有り

隰有荷華 隰さばには荷華有り

不見子都 子都を見ずして

乃見狂且 乃いまし狂を見る

に對する顧夢麟の注解では、まず朱公遷の説を引用してから、自分の考えを示して次のように言う。

『疏義』は、「あちら〔の山や澤〕ではあるべきものがすべて揃っているというのに、こちら〔の私の周り〕では會うに相應しい人には會えず、會うに相應しからぬ人にはなんと出會ってしまった。つまり尋常の物によって怪異な事象を興したのである」と言う。私が考えるに、この解釋に據れば反興ということになる。しかしながら「子都を見ず、乃ち狂を見る」と詠っているのは、實はまさしく子都に出會ったと言っているのである。つまり、喜びが極まって自分の思い人である相手〔の子都〕に戯れて「子都のことを「狂」と呼んで」言った言葉である（疏義、彼所宜有者皆有、此所宜見者不見、不宜見者乃見之。蓋以尋常之物、而興怪異之事也。麟按、此反興也。然言不見子都乃見狂且者、正言見子都耳、蓋喜極而諠之之辭<sup>(82)</sup>）

朱公遷の解釋に基づけば、本章は會うべき相手がいまだに現れず、會うべきでない相手が現れたと詠っていて、これは反興に屬する表現法ということになる。しかし顧夢麟は、朱熹が本詩「詩序辨說」で「男女戲諠の詞」と主張しているのに基づいて解釋を行った。詩中で「子都を見ず」と言うのは、實は「子都と會った」ということで、このようにとると興句の感情と流れとに一致するので「正言す」、すなわち正興であるということになる。顧夢麟は明らかに朱熹の詩篇の捉え方に基づき、言外の意という角度から、朱公遷と異なる解釋を提出したのである。

以上の考察から、顧夢麟は朱公遷の説に飽き足りない場合、詩經のテキストと朱熹『集傳』に立ち戻って答えを求めたことがわかる。彼はとりわけ朱熹が解釋にどのような虚字を用いているかに注意して、それによって興句と應句の範圍と詩篇の意味を判斷し、その文脈が正か反かを考えた。けれども、顧夢麟は朱熹の説にまったく無條件に従っ

たわけではない。彼は特に朱熹の注解の中の、どの部分が詩經のテキストと直接関わっていて、どの部分が補充的な説明であるかを見極めることに意を用い、區別した。<sup>(64)</sup>このことからわかるように、顧夢麟は詩經を解釋する時に最終的にはやはりテキストを最終的な根據としたのである。

#### 4 押韻によつて章句を區分するための條件

顧夢麟が興體を説明する際に、朱公遷と最もはつきり違いを見せるのは、押韻を詩の原理とし、合わせて詩章の構造を區分するための根據とすることであり、またそれは興體の範圍を考察することとも關連している。押韻については、顧夢麟は孔穎達が早くに類似の説明を行っていることに注意していた。<sup>(65)</sup>明・徐光啓もかつて次のように言う。

およそ詩經を解釋するためには、表現の肌理を分析する必要があることはもとよりであるが、しかし詩經の詩篇の條理や脈絡というのは、他の書物のそれとは異なる。他書は古人の議論や事跡を記述しているので、文章の對偶や照應の關係は、一目でわかるほど明らかである。一方、詩經は古人が聲に出して詠ったのを書き記したものであるから、その對偶や構造を事實や論理のみに頼つて論じるにはふさわしくない。風・雅の詩體は、おおむね二句で一つの節を作るが、ただ三頌だけは少々變則的な詩體である。しかしながら、通常どおりのものが多數を占め、その大多數について言えば、みな押韻字を見極め、その用韻の法を考察できれば、そのリズムを把握することができる……韻學が久しく廢れてからというものの、宋・吳棫（政和八年、一一一八、進士）、字は才老の叶韻が盛んに用いられ、朱熹先生でさえもこの弊を脱することはできなかったために、詩經の正しい意味は人

に知られることなく、永遠に傳承が途絶えたような状況になってしまった。ああ、目前の身近なことは至って簡易なものであるのに、數百年來理解する者がいないというのは何と惜しむべきことか、何と笑うべきことか。詩經の眞の意義がわからなくなってしまったのも、怪しむには足りないことである（大氏說詩固要析肌分理、但其條理脉絡頗與他書不同。他書記述古人議論事迹、其對待炤應、言下粲然。詩則記古人聲音、其對待分析、不宜專論事理。風・雅之體、大率二句爲一節、惟三頌稍有變體。然如常爲多、要其大都、全要認取韻腳、審其用韻、便可得其節奏……自韻學久廢、盛用吳才老叶音、雖朱子未免據此、此義寥寥、千古絕響矣。嗚呼、目前近事至易至簡、而數百年來遂無知者、豈不可惜、豈不可笑、詩義不明、亦復安足怪乎<sup>(67)</sup>）

顧夢麟は『說約』にこの文章を引用した後、次のように續ける。

これらのことは楊彝、字は子常と私が自身で悟ったことであるが、徐光啓、諡は文定が早くに説を發表していた。それを文獻に據つて檢證した結果、その結論の正しさに驚嘆したので、いまその説を一つ一つ取り出して紹介し、天下共有の知的財産としたい。かれがまだ充分に考察を行っていないところについては、類例を參照して考究すればよい（此等子常與麟私爲獨悟、而文定先之、往爲文徵、既歎實獲、今更一一拈出、與天下共見、有未周者、因類而求、可也<sup>(68)</sup>）

顧夢麟が特にこのことを注記したのは、彼が音韻を重視するのは徐光啓の影響を受けたからではなく、彼と楊彝自

身が悟り得た認識であることを示すためである。しかし、徐光啓の説は比較的早くに發表されていたが故に、書中に収録することによって自身の考えを補強しようとしたのである。他に、彼は「詩經說約序」の中で次のように言う。

詩には篇・章・句というものがあり、それによって連・轉・截が生じるが、その形式風格と意味はみな韻脚に依っている（至詩有篇、有章、有句、因而有連、有轉、有截、其體勢意思、皆依韻脚<sup>(99)</sup>）。

これからわかるように、顧夢麟にとって押韻の韻脚は、詩經の篇章の構造を判斷するための重要な手掛かりとなっている。このことを、周南「關雎」の二章と三章を例にして具體的に見てみよう。<sup>(100)</sup>

參差荇菜 參差たる荇菜を

左右流之 左右に流<sup>もど</sup>めん

窈窕淑女 窈窕の淑女を

寤寐求之 寤寐に求めん

求之不得 求めて得ざれば

寤寐思服 寤寐に思服す

悠哉悠哉 悠なるかな悠なるかな

輾轉反側 輾轉反側す

「二章」

參差荇菜 參差たる荇菜を

左右采之 左右に采らん

窈窕淑女 窈窕の淑女を

琴瑟友之 琴瑟をもて友とせん

參差荇菜 參差たる荇菜を

左右芣之 左右に芣えらばん

窈窕淑女 窈窕たる淑女を

鍾鼓樂之 鍾鼓をもて樂しましめん  
「三章」

按語の中で彼は次のように言う。

興の意味は、音韻的對應關係から取っているものが多い。前章では「參差荇菜、左右流之。窈窕淑女、寤寐求之」の「流之」と「求之」が對應している。本章では「采之」と「友之」、「芣之」と「樂之」がそれぞれ對應している。もし前章が一章一つの興で一貫しているとすると、本章では詩句表現が完結していないということになってしまう。そのような道理があるはずがない（興之義多取聲韻相應、前章以流之、求之相應、此章以采之、友之、芣之、樂之各相應。若前章直興到底、則此章爲不完之語矣、豈有此理乎<sup>(1)</sup>）

また、次のようにも言う。

『集傳』に「采は此禮の反」、「友は羽已の反」とあり、本來は韻を踏む。「樂」は去聲で、またすなわち「莧」と韻を踏む。北方の人の發音はみなこのとおりである（集傳、采此禮反、友羽已反、本相叶。樂去聲、亦便與莧叶。北人語皆如此也<sup>(7)</sup>）

顧夢麟の説に基づいて、詩句の中の興體の範圍を確認してみよう。本詩第二章は「流」と「求」とが押韻しているの  
で、「參差たる荇菜を、左右に流<sup>もと</sup>めん。窈窕の淑女を、寤寐に求めん」が興體の範圍であると、彼は言う。すなわち、  
前二句が興句で、後二句が興される内容ということなる。そしてその後の四句は、前半四句で詠われた情感をさらに  
強め、淑女に對する思ひの深さが極限まで高まっていることを表現する役割を担っている。したがって、この章は一  
章全體を一つの興が支配する形になっている<sup>(8)</sup>。

それに對して第三章は、「采」と「友」が押韻し、それとは別の韻で「樂」と「莧」とが押韻している。第三章は前  
半四句と後半四句と同じ内容のように見えるが、このように韻脚が異なることから判斷すると、それぞれ別の内容  
を詠う獨立する二つの興であることがわかる。とすると、第三章は第二章と構造が異なることになる。しかし、これにつ  
いて顧夢麟は、「本章後半の第八句で『樂』と言っているのは、和やかで平和な雰圍氣が最高の境地に達したことを  
表している（此章下截言樂則和平之極意）」と説明する。つまり、第三章は章の構造こそ異なるが、言わんとする内容

は章の前半から後半にかけて感情や雰圍氣が高まっているという意味で、同様に「次第に盛り上がるような表現をする（層疊致辭）」効果を與えていたのであり、したがって意味内容的には完備しているということができる。

このように、顧夢麟は押韻の状況に基づいて、興體の範圍を判斷している。二章と三章とで、興の數こそ異なっているが、詠っている内容から考えると、いずれも感情や雰圍氣の盛り上がりを表現しているという點で同じような構造が見出され、詩人の情感が細やかに變化する様が現れているのである。

顧夢麟は押韻を基準にして、『集傳』の解釋を修正してもいる。秦風「終南」首章の、

終南何有 終南 何か有る

有條有梅 條有り梅有り

君子至止 君子 至る

錦衣狐裘 錦衣 狐裘せり

顔如渥丹 顔はをもちあつくつ渥けたる丹にの如し

其君也哉 其れ君なるかな

を例にしよう。顧夢麟は經文と『集傳』の後に、各學者の注釋を次のように並べる。

蘇轍『詩集傳』（以下、「蘇傳」と略稱）に次のように言う——終南山には草木が生えて、それによって山は自



らを着飾り、鬱蒼とした姿を現す。君子とは言えば、衣裳を身に着けることによって、自らを嚴かできらびやかにし、その尊さを完成させる。「顔如渥丹、其君也哉」は、嚴かで畏れおおいという氣持ちを表す言葉である（蘇傳、終南則有草木以自衣被而成其深、君子則有服章以自嚴飾而成其尊。顔如渥丹、其君也哉、嚴憚之辭也）

『疏義』に次のように言う——終南の山には、條がありさらに梅もある。君子の服には、衣がありさらに裘もある。いずれも二つの物を兼ね備えているという意味なので、だから興としたのである（疏義、終南之山、有條又有梅。君子之服、有衣又有裘、皆二者兼備之義、故以爲興<sup>(75)</sup>）

そして、それに對する批評を行い、次のように自説を述べる。

私が考えるに、右の『蘇傳』と『疏義』の説は極めて正しい。『集傳』に、「『梅』は莫悲の反に叶ふ、『裘』は渠之の反に叶ふ、『哉』は將黎の反に叶ふ」と言い、毎二句の下一句が韻脚である。「渥丹」の「丹」の字は韻脚ではない。ということは、章六句が三節に分けられているのだが、興（興句と應句が對應している部分）はやはり第四句までで終わっていて、下の第五・六句は別の話題である。『集傳』が「容貌衣服は君主の身分にふさわしい」と言っているのは、これは詩の言わんとすることを解釋したもので、詩の理を説明したものではない。また、鄘風「定之方中」二章について、「望景觀卜」という解釋をしたのと同じように（章の意味的構造を捉え損ねた説であり）斷じて従うことはできない○黄佐の『通解』や徐光啓の『講意』などは、いずれも「有條有梅」によって「有服有容」を興すると考えたがつているが、そうすると詩の語氣は五句までで終わり、末句は第一句

から第五句までをすべて承けるということになってしまふ。これでは、詩には音樂的な調和がないということになってしまい、説明の文章としてしか理解できないことになってしまふ。蘇轍、字は子由、以後は、わずかに朱公遷、字は克升のみが正しい解釋をしているだけだったのが、『大全』はそれらをすべて削除してしまつた。書物を編集するという行爲もどうしていいかげんにしてよいものだろうか（麟按、上二說最是。集傳、梅、叶莫悲反。裘、叶渠之反。哉、叶將黎反。俱二句方下一韻腳。渥丹、丹字非韻也。則六句爲三節。而興亦至四句止、下二句另說耳。集傳言、容貌、衣服稱其爲君、是詩解而非詩理、亦如定中望景觀卜之例、斷不可從○如通解、講意等、皆欲以有條有梅興有服有容、則語氣至五句止、而末句總承之。此必詩無音節、章句則可耳。子由之後、僅見克升、而槩爲芟去。纂述之學又烏可造次也<sup>(7)</sup>）

本章の興體の範圍はいつたいどのように區切ればよいだろうか。顧夢麟は興體は前半四句まで、後半二句は興とは關係しないと考え、それを三つの面から説明している。第一に、彼は朱公遷が「梅」「裘」「哉」の三字を押韻の韻脚であるとしているのに基づいて、本章は、二句ひとまとまりで後の句が韻脚であるので、合わせて三つの部分からなると結論づける。そして、第五句の「丹」の字は前の句と押韻していないので、興句の範圍からはずれるとする。

第二に、朱熹は、「容貌、衣服が君主の身にふさわしい」と注していることから見て、明らかに「錦衣狐裘せり、顔は渥けたる丹の如し、其れ君なるかな」をひとまとまりの意味として解釋している。これについて、顧夢麟は、朱熹の説は詩篇の意味を説明する立場には適合しているが、詩篇の理には合致していないと考える。それでは「詩篇の理（詩理）」とはいったい何であろうか。彼の考えでは、「詩理」とは詩經の音韻と文字が平行して對應する構造のこ

とである。彼は、鄘風「定之方中」二章を例にして説明する。

升彼虚矣 彼の虚に升り

以望楚矣 以て楚を望む

望楚與堂 楚と堂とを望む

景山與京 景山 京とをさへに

降觀於桑 降りて桑を觀る

ト云其吉 トして云ふ其れ吉なり

終焉允臧 終焉として允に臧し

朱熹はこの章を注して「此章本其始之望、景觀ト而言、以至於終、而果獲其善也」と言い、「土地を眺め方角を測り桑の様子を觀察しトウ（望景ト觀）」という「本章六句までを意味の一纏まりとする」解釋を示した。これに従うならば、本章は第三句から第六句までが意味上のまとまりとなる。それに對して顧夢麟は、本章は「前半四句がひとまとまり、後半三句がひとまとまり」であるべきとする。その理由は次のとおりである——本詩第二章の前半二句は「虚」と「楚」とが押韻し、かつまた「虚に升る」と「楚を望む」は語形的にも語義的にも對應關係にある。また、三・四句も同様に語句的にも押韻的にも對應している。故に前半四句はひとまとまりとなつていると考えられる。それに對して、下三句は一氣呵成に詠われている。<sup>(17)</sup>

このような「定之方中」二章の例は、「終南」首章を解釋する上でも同じく適用でき、前半四句が語句的にも押韻的にも對照的に配列され、下二句が別の部分を形成していると認められる。

第三に、蘇轍と朱公遷の注釋は、いずれも「終南」首章の前四句を興體としており、黃佐『通解』と陸聚岡『講意』が、第四句の「衣服」と第五句の「容貌」を一つに併せ、どちらも興體だとしているのと異なる。「服有り容有り」とはもともと朱熹の解釋であるが、顧夢麟は詩經の語句と音韻の組み合わせの法則に基づいて詩篇の意味を説明する。朱熹の説に完全に従うのではなく、詩經のテキストを尊重する態度を示している。

顧夢麟にとっては、これは明代末年の科擧に關連して切實な問題であつた。彼は「詩經說約序」の中で次のように言う。

隆慶（一五六七―一五七二）、萬曆（一五七三―一六一九）年間以降、世の人々はみな心學に趨り、一篇の詩のあるいは一章數句ばかり重視し、あるいは一文字ばかり重視して、詩篇の條理に従わず、何かの事實と無理やり話を合わせ、詩という形はどこかに消えてしまうような状態になつてしまつた。一言でこのような状態を正すならば、韻があつてこそ詩があり、詩があつてこそ文がある。縦から見ても横から見ても、そこを追究してみても、詩でないことはなく、文でないことはない。そうなつたならば、こじつたり穿鑿したりばらばらにする弊風は、盡く廢されて正しい説にまとまるだろう（隆、萬以降、世皆驚新學、于一篇或重一章數句、或重一字、不循條理、專事牽合、文體喪矣。一言正之曰、有韻而後有詩、有詩而後有文。雖縱之橫之、衝之撞之、無非詩、無非文也、則提掇穿插割裂之習、且盡廢以爲約<sup>(78)</sup>）。

科舉において詩經の章句を勝手氣ままに切り取り分割する弊風が現れ、また隆慶・萬曆年間以後、様々な新説が次々と出現した。顧夢麟は詩經を格物窮理の對象と見なし、詩經を解釋するためにその客觀的な法則、すなわち「詩理」を発見しようと試みた。その法則とは「韻」を基礎とするということであった。

この問題を重視する態度が、彼と朱公遷との違いを表すものである。二人はともに、詩經の興體の體系性を有する特徴を説明することに努力したが、朱公遷が重んじたのは「内容」あるいは「形式」の呼應であり、特に形式上の虚詞や助字の對照に注目した。これが彼の特徴である。

それに對して、顧夢麟は朱公遷の基礎の上に立つて、「韻」こそが詩の構造を構成する根本的な条件であると強調した。かくして、彼は朱公遷の内容（「義相因る」）と形式（「語相應す」）との平行關係を重視する態度から轉換して、形式を優先した。そればかりでなく、朱公遷の挙げた形式的條件の中に、朱公遷が注意を拂わなかった押韻の現象を加えもした。このことから顧夢麟は、朱公遷の詩經の興についての學説を繼承するとともに、彼自身の判斷の根據と條件を展開したことができる。

## 5 結論

顧夢麟は、『大全』が朱公遷の比興論を削除したことに不満を持ち、『説約』を撰述し、『大全』の初本、すなわち朱公遷の『疏義』に立ち戻り、明初の詩經の科舉參考書の眞面目を回復することを志した。ただ、同じく詩經科舉類の經注本とは言いながら、崇禎十五年（一六四二）に完成した『説約』は、『大全』の登場からすでに二二七年とい

う久しい時を経過していた。したがって、『說約』という書物が表現しているのは、実際には顧夢麟が心に描いた理想の詩經科舉經注本であつた。かつまた、この書によって朱公遷の比興論の意義を改めて掘り起こした。それは、詩經についての體系性を具えた文學的視野、すなわち「詩理」を科舉のための詩經注疏の中に組み入れることが目的であつた。ただし、それは「詩理」の内容を改めることでもあつた。

同時に、これは明末の詩經學の重點課題と、『集傳』注解の方向性を反映している。具體的に言えば、顧夢麟は朱公遷の學說を繼承し、詩人が興體の詩の中でどのような言語表現を行っているかを考察するために、「炤應」説を提唱し、「正興」と「反興」などの問題を議論した。それだけではなく、彼は互文や雙關語などといった文學的な視點を用いることによって、朱公遷の學說を發展させた。

しかしながら、彼は朱公遷の學說を全面的に受け継いだわけではなかつた。彼は詩經のテキストと朱熹の『集傳』に立ち戻り、朱公遷が行つた詩意の有無と正反の判斷が正しいか否かを改めて検討した。また、興體の章句の範圍を改めて確定した。その上、彼はさらに一歩進んで、「詩理」こそが「韻」の核心的な條件であるとして、それを考察の根據とした。

これらのことからわかるように、朱公遷と顧夢麟はいずれも詩經の體系的な特徴を解明することを重んじ、いずれも朱熹のいわゆる「格物窮理」の態度によつて詩經の興體を探索したが、そこで言う「理」の具体的内容については異なる理解をしていた。朱公遷は、興體の成立條件を探索する際に、内容と形式をいずれも重視し、かつ形式においては虚詞と實詞の對應を重視した。これは元代に「虚字」を重んじる學問が發展したと關係している<sup>⑨</sup>。それに對して、顧夢麟が構築した興體の體系は、「押韻」を必須の要素とするもので、詩經の章句をより一層重視するもので

あった。これは明末の詩經學の特徴を反映している。

以上の考察から、『説約』の經學的特徴が理解できる。本書は朱熹『集傳』を主とするが、朱熹の説が詩經テキストの原理に合わない場合は、彼はやはり詩經のテキストに従った。これは經典を尊重する彼の態度の表れである。また、彼は押韻によつて章や詩句の構造を判斷し、文脈の流れを考察した。これは彼が朱公遷と異なり、詩經テキストの體系性について分析することを自らの研究の中核に据えたことを示す。『説約』は經學、文學と朱子學を融合した著述とすることが出来る。

ただ忌憚なく言えば、明代の科擧が要求するところに應じたが故に、彼が採用した押韻は、主に朱熹の考えに基づき、『經典釋文』・豐坊『魯詩世學』・何楷『詩經世本古義』・徐光啓『毛詩六帖講意』などを補助的資料として用いたものであり、古音の音韻變化に對してはとりわけ注意を拂つてはいない。したがつて、彼が押韻を基礎として構築した詩理については、なお今後さらなる検討が必要である。

## 注

- (1) テキストは、中央研究院中國文哲研究所籌備處影印日本寛文九年刊本、一九九六年六月初版本を用いた。
- (2) 顧夢麟は崇禎六年（一六三三）に副榜貢生に合格し大學に入ったが、生涯出仕することがなかった。彼は同郡の楊彝（一五八三～一六六一）と江蘇一帯の名士を集めて「應社」という結社を作った。彼のもとで學ぶ者は數百人を下らず、往々にして顧夢麟・楊彝兩名の學說に従い、次々に科擧に合格した。兩名は科擧に合格することはなかったけれども、その名聲は高く鳴り響き、呉の地域では深い影響力を有していた（蔣秋華『詩經説約』「導言」、臺北・中國文哲研究所籌備處、一九九六、四二～四三頁）。
- (3) 朱彝尊著、侯美珍等點校『點校補正經義考』（臺北・中國文哲研究所籌備處、一九九七、第四冊、卷一一七、二二六五頁）。

- (4) 中國社會科學院圖書館整理『續修四庫全書總目提要』「經部・詩類」(北京・中華書局、一九九三、三二七頁)。
- (5) 劉毓慶『從經學到文學——明代「詩經」學史論』(北京・商務印書館、二〇〇一、一〇一頁)。
- (6) 沙先一「顧夢麟『詩經說約』對朱熹『詩集傳』的補充與糾正」(『古籍研究』、安徽大學文學院等、二〇〇二年第二期、四六—四八頁・六八頁)。介金嶸『宋元明時期朱子「詩經」學的傳承與嬗變』(北京・知識產權出版社、二〇二二、三七七—三九一頁)。
- (7) 王婉琳「晚明社會變遷背景下的『詩經說約』研究」(內蒙古大學碩士學位論文、二〇二〇年六月)。侯利利「顧夢麟『詩經說約』研究」(吉林大學碩士學位論文、二〇二二年五月)。
- (8) 三浦秀一「張自烈撰『四書大全辨』與明末清初士風」(李申・陳衛平主編『哲學與宗教』第六輯、上海・上海人民出版社、二〇一二、四頁)。
- (9) 顧夢麟「詩經說約序」(『詩經說約』、第壹冊、四—六頁)。
- (10) 顧夢麟は「詩經說約序」の中で特に説明はしていないが、『說約』には、本文で言及した著述の他に、陸德明『經典釋文』、陸聚岡『詩經講義』、黃佐(一四九〇—一五六六)『詩經通解』、豐坊(一四九二—一五六三)『魯詩世學』、馮應京(一五五五—一六〇六)『六家詩名物疏』、陸化熙(一六一三年進士)『詩通』、徐光啟(一五六二—一六三三)『毛詩六帖講意』、沈守正(一五七二—一六二三)『詩經說通』、何楷(？—一六四五)『詩經世本古義』、および朱公遷『詩經疏義』中に附載される王逢の『輯錄』と何英の『增釋』が引用される。
- (11) 顧夢麟撰「詩經說約序」に、「詩大全本疏義、猶四書大全本輯釋、皆抹去向人、奄爲己物。然四書大全之爲數繁、則雖費料揀、已厭眾觀。詩大全略矣。至疏義中精析比興處、又盡芟之。此當求初本、又合傳・箋・疏、及宋元以來諸說家於紫陽學揆一者附麗焉。旁見側出、令廣所開發、其晷象・節候・疆域・譜系・禮樂・器物・卉木・禽蟲・小注未具者、皆采之尚書・左氏傳・國語・三禮・爾雅諸編、益拓其證據、庶幾便稽覽」と言う。
- (12) 黃宗義は次のように言う。

『說約』が世に出て以來、諸書はみな廢れた。博士が講席に座って講じ、學生が科舉受験のために座って拝聽するのは、みな顧夢麟先生の學說であつた。當時天下に文名を知られた士は、みな科舉に合格せんと志を抱いた。張天如は『注疏』によって、楊維斗は王・唐によって、艾千子は歐・曾によって、ただ一時の名聲を誇っただけだつた。ひとり先生の傳のみ久しくしても衰えることはなかつた(自說約出而諸書俱廢。博士倚席而講、諸生帖坐而聽者、皆先生之說也。當是時海內有文名之士、皆思立功於時藝。張天如以註疏、楊維斗以王・唐、艾千子以歐・曾、僅風尚一時。惟先生



之傳、久而不衰」(黃宗義「顧麟士先生墓誌銘」、『詩經說約・顧夢麟研究資料彙編』、第五冊、二一三四頁に收録)ここで、黃宗義が問題にしているのは「四書說約」であるが、文中に描かれている状況から、顧夢麟の著作が明代の知識人に重視されたことがわかる。

(13) 『說約』は、日本ではまた『詩集傳說約』『詩經』などとも稱された。現在、六種の版本が見られる。

①『纂序詩經說約集注』八卷四冊、内題「文治堂三訂詩經說約集注」、服部南郭手澤本

②『詩經說約』二十八卷、三条通堺町(京都)出雲寺松柏堂

③『詩經說約』二十八卷、三条通町西へ入町(京都)河南儀兵衛、寛文九年刊本の重印本

④『詩經說約』二十八卷、京都芳野屋權兵衛、有崇禎十五年(一六四二)序、寛文九年刊本の重印本

⑤『詩經說約』二十八卷、堺屋敷、寛文九年刊本の重印本

⑥『詩經說約』二十八卷、出雲寺和泉掾、寛文九年刊本の重印本

(王曉平「日本詩經要籍輯考」、北京・學苑出版社、二〇一九、一三九頁、に據る)。

この他、江戸時代の菅野侗・中井履軒・中村惕齋・猪飼敬所および大正時代の釋清潭などは、いずれもその著述中に『說約』の内容を收録している。

(14) 顧夢麟『詩經說約』、陳啟源『毛詩稽古編』および『四庫全書總目』はいずれもこの説を述べている(楊晉龍『《詩傳大全》來源問題探究』、林慶彰・蔣秋華主編『明代經學國際研討會論文集』、臺北・中央研究院中國文哲研究所、二〇〇二年修訂一版所收、三二一～三二二頁)。

(15) 『說約』周南「關雎」(第一冊、卷一、十二頁)。

(16) 楊晉龍は次のような主旨を述べている——顧夢麟と陳啟源の説では次の二點の問題が考慮されていないため、その説は成り立たない。第一に、顧夢麟と陳啟源は恐らく、『大全』と『疏義』とが重複している條目が、すべて朱公遷の『疏義』に明・王逢が增補を加えた「輯録」の部分に属していることに注意することなく、『大全』が『疏義』を敷き寫したと主張したと思われる。しかし、王逢による「輯録」と明・何英による「増釋」を收録した『疏義』が実際に刊刻流通したのは、明・正統九年(一四四四)になってからのことであるが、『大全』は永樂十五年(一四一七)に刊行され學宮に頒布された。したがって、実際には王逢が『大全』の條目から説を取ったのであり、『大全』が『疏義』を敷き寫したわけではない。第二に、顧夢麟は明代の王逢を元代の王逢と誤認した。以上、詳しくは楊晉龍前掲論文、三二七～三二九頁を参照のこと。筆者は、楊氏の上げる第一の理由、顧夢麟は王逢と何英の説を朱公遷の説と混同したというのは、成立する可能性は低いと

考える。なぜならば、顧夢麟はその注釋の中で、『輯錄』は王逢氏の著にして、『疏義』に附したものである。以下同じ（増釋何氏英著、亦附疏義、下同）（周南「兔置」、《疏義》、第壹冊、卷一、五〇頁）と述べ、さらに『増釋』は何英氏の著にして、やはり『疏義』に附したものである。以下同じ（増釋何氏英著、亦附疏義、下同）（王風「大車」《說約》、第貳冊、卷六、三八七頁）とも述べている。これからわかるように、顧夢麟は朱公遷の『疏義』の中に王逢と何英の注釋が存在することをすでに理解し、區別もしていた。したがって、王何の説を朱公遷の説と見なしたということはあるまいからである。

(17) 大雅「蕩」《說約》（第肆冊、卷二二、一七二五頁）の原文は次のとおりである。

麟按、後四句故有兩解。一解由無人故不明、是責在輔弼也、孔疏、呂記、嚴緝、大全並同。一解由不明故無人、是責在舉錯也。疏義、通解、講意、說通、詩通、古義並同。然大約呂、嚴與大全本注疏、通解以下本疏義也。亦不辨誰爲一定之說。

(18) これは、南宋・輔廣『詩童子問』の文で、『大全』大雅「蕩」に引用される（卷十八、四頁）。

(19) 『疏義』大雅「蕩」（卷十八、七八九頁）。

(20) 『周禮』「春官、大師」に、「大師は六律、六同を掌り、以て陰陽の聲を合す……六詩を教ふ。曰く風、曰く賦、曰く比、曰く興、曰く雅、曰く頌。六德を以て之が本と爲して、六律を以て之が音と爲す（大師掌六律、六同、以合陰陽之聲……教六詩。曰風、曰賦、曰比、曰興、曰雅、曰頌。以六德爲之本、以六律爲之音）」と云う（臺北・藝文印書館、清嘉慶二十年南昌府學刊本、一九五五、卷二三、三五四・三五六頁）。

(21) 孔穎達は、「大序の」上文には詩の働きはきわめて大きく、明らかに一つの意義によって言い尽くせるものではないので、だから、また「詩には六義がある」と言つて説明をするのだ。一方、『太師』の方はその上文に「詩」という文字が現れないので、「毛詩大序のように直接「六義」ということはできないので、だから「六詩」と言うのである。それぞれが文の運びによる違いがあるが、その實は同一である（上言詩功既大、明非一義能周、故又言詩有六義。大師上文未有詩字、不得徑云六義、故言六詩。各自爲文、其實一也）」と云う（孔穎達『毛詩注疏』周南「關雎」、臺北・藝文印書館、清嘉慶二十年南昌府學刊本、一九五五、卷一、十五頁）。

(22) 朱熹は、「案ずるに、『周禮太師に六詩を掌りて、以て國子を教ふ。曰く風、曰く賦、曰く比、曰く興、曰く雅、曰く頌』と言ひ、『毛詩大序』に「六義」と言ふ。思うに古今の詩の條理とはこの六義を外れるものはないのである（按周禮、太師掌六詩、以教國子、曰風、曰賦、曰比、曰興、曰雅、曰頌、而毛詩大序謂之六義、蓋古今聲詩條理、無出此者」と云う（朱熹『楚辭集注』、朱傑人主編『朱子全書』第十九冊、上海古籍出版社、二〇一〇、卷一、二〇頁）。

- (23) 『説約』小雅「蓼莪」(第參冊、卷十五、一一六頁)。  
 (24) 『説約』小雅「四月」(第參冊、卷十五、一一九二頁)。  
 (25) 「氓」六章の按語で顧夢麟は、「『淇則有岸、隰則有泮』の『岸』と『泮』(という二つの字)は、この二句が「總角之宴、言笑宴宴、信誓旦旦、不思其反」の四句の反興であることを示している。「地上の川や澤といたったものには限りがあつてはつきりとわかるものだが、人間の行爲には終わり盡きることがあるのにそれを思うことがない。これは興句と應句で意味を反轉させて興としたのである(地有限止而可見、事有終窮而不思、此反其意以爲興也)」という『疏義』の説はきわめて明確である。『詩緝』の「淇水には岸があり、澤には堤がある。どうしてあなたの心には堤や岸が無く知り難いのだろうか。これは第四章の『士や極まること罔し(士也罔極)』というのを承けたものである(淇水則有岸、隰則有陂泮。何汝心之無泮岸、不可知也。則上章所謂罔極也)」という解釋は、蘇轍「詩集傳」の「淇水には岸があり、澤には堤がある。それなのに、どうしてあなたの心は知り難いのか(淇猶有岸、隰猶有畔。何女心之不可知也)」という解釋に基づくものだが、さらに一層理解を深めている。故に、六義について先儒がまだ明らかにしていないものがなおあるというのは、こういう類である(岸、泮之云、以兩句反興四句也、疏義說大明。詩緝本子由、然多一層矣。故曰六義於先儒尚有未明者、凡此類)と言う(『説約』衛風「氓」、第壹冊、卷五、三二九頁)。つまり、顧夢麟の見るところ、それぞれの學者の解釋は一樣ではないが、その中でも朱公遷の六義についての説明が最も明晰であるということである。
- (26) 史甄陶「朱公遷『詩經疏義』對『詩集傳』的繼承與發展——以「興」體詩的闡釋爲中心」(『臺大中文學報』、第六三期、二〇一八年十二月)。
- (27) 『説約』周南「關雎」(第壹冊、卷一、十一～十二頁)。  
 (28) 「麟每言興與比相似、只『有昭應』爲興、『無昭應』爲比、皆與朱子之言合」(『説約』周南「關雎」、第壹冊、卷一、十四～十五頁)。
- 譯者補記——「昭」は「照」の異體字。以下、原典からの引用の場合は「昭」で表記するが、本論文著者の論述部分では讀者の理解の便宜を考慮して「照」の字を用いる。
- (29) 『説約』周南「關雎」(第壹冊、卷一、十二～十三頁)。  
 (30) 『大全』小雅「南山有臺」(卷九、五二一頁)。  
 (31) 『疏義』小雅「南山有臺」(五二一頁)。  
 (32) 朱公遷は「南山有臺」首章を説明して、「これは、山には臺とか萊とかの草が生えているというだけのこと、二つの句

に分けて表現しているのは互文である（此言山有臺・萊耳。分屬兩句、互文也）と言い、また「南山や北山には、臺が生えまた萊が生えている。君子たる人には徳があり、またこのような福がある（南山北山有臺又有萊、君子之人有徳又有此福）」と言う（『疏義』小雅「南山有臺」、卷九、五一九頁）。彼が、興句二句は互文として解釋すべきで、應句もまた同様に互文として解釋すべきと主張したことがわかる。

(33) 『説約』小雅「南山有臺」（卷十二、八七三頁）。

(34) 『疏義』は、文勢が順か反かという説明のしかたをすでに提唱している（『疏義』周南「關雎」、卷一、二〇四頁）。

(35) 『説約』小雅「四月」（第參冊、卷十五、一一九一頁）。

(36) 『説約』小雅「四月」（第參冊、卷十五、一一九一頁）。

(37) 『説約』小雅「四月」（第參冊、卷十五、一一九〇頁）。

(38) 『説約』小雅「四月」（第參冊、卷十五、一一九〇頁）。

(39) 『説約』小雅「四月」（第參冊、卷十五、一一九一頁）。

(40) 『説約』鄭風「野有蔓草」（第貳冊、卷六、四三八頁）。

(41) 『説約』鄭風「野有蔓草」（第貳冊、卷六、四三八頁）。

(42) 『説約』小雅「車牽」（第肆冊、卷十七、一三一八頁）。

(43) 朱熹の「車牽」四章の注は、「岡に登って薪を伐れば、その葉がびっしり生えている。私はあなたを見ることができれば、我が心は安らぐ（陟岡而析薪、則其葉湑兮矣。我得見爾、則我心寫兮矣）」（『集傳』小雅「車牽」、卷十四、二五一頁）と言  
い、「而」と「則」の字を轉折詞として用いることによって、興體の詩のニュアンスを説明するとともに、興の範圍を示し  
ている。

(44) 『説約』秦風「車鄰」（第貳冊、卷六、五六〇頁）。

(45) 『集傳』小雅「車牽」（卷十四、二五一頁）。

(46) 「私が考えるに、この章は前二句によつて後四句を興するもので、これまた一つのスタイルである。『集傳』の注を見ると、  
三つの『則』の字を使つて解説しているのが注目される。ということは、『馬服す』を『四牡 駢駢たり』と言ひ、『御良』  
を『六轡如琴』と言つて、これが『高山』と『景行』とに照應させ、やはり二つの事柄を二つの事柄に興している。このこ  
とをよくよく理解しなければならない（麟按、此章以二句興四句、又一體也、觀集傳三則字可見。然馬服言四牡駢駢、御良  
言六轡如琴、炤高山、景行、亦是以前兩項興兩項、須有分曉）」（『説約』小雅「車牽」、第肆冊、卷十七、一三一九―一三二〇

頁。

(47) 『説約』が『疏義』の注解を引用しているのは合計三六七箇所ある。顧夢麟は朱公遷が文學的觀點から詩經を解釋していることに注意する以外に、同時に朱公遷が理學思想によって詩經の内容を解釋している例も、顧夢麟は集注の中に入れてい

る。しかし、按語中では、それについて直接議論は行っていない。

(48) 『説約』小雅「青蠅」(第肆冊、卷十七、一三二一—一三二二頁)。

(49) 『説約』邶風「雄雉」(第壹冊、卷三、一七五—一七六頁)。

(50) 『疏義』鄭風「蓍兮」(卷四、三五八頁)。

(51) 『説約』鄭風「蓍兮」(第貳冊、卷六、四二四頁)。

(52) 『疏義』齊風「東方之日」(卷五、三七一頁)。

(53) 『説約』齊風「東方之日」(第貳冊、卷六、四五六頁)。

(54) 『説約』邶風「簡兮」(第壹冊、卷三、二二—二二二頁)。

(55) 同様の例として、小雅「常棣」三章を擧げることができる。顧夢麟は、「これは第一句「セキレイが危険を知らせようと鳴きながら空を飛び、尾羽を震わせて野原を歩いている(脊令在原)」によって第二句「兄弟が危急の難に遭っている(兄弟急難)」を興する。『詩集傳』注文の『而言』の二字を見ると、その下の「危難の時にはよき友がいたとしても、長く歎くにすぎない(每有良朋、況也永歎)」二句は話題が変わっていることがわかる(此以第一句興第二句、觀注而言二字、即知後二句另説)」。『説約』小雅「常棣」、第貳冊、卷十一、七九三頁)。

(56) 『説約』周南「關雎」(第一冊、卷一、十一頁)。

(57) 『集傳』周南「關雎」(卷一、二頁)。

(58) 『集傳』邶風「相鼠」(卷三、五〇頁)。

(59) 『説約』唐風「山有樞」(第貳冊、卷八、五一九—五二〇頁)。

(60) 『説約』唐風「扶杜」(第貳冊、卷八、五三四頁)。

(61) 『説約』召南「江有汜」に、「麟按、通解謂首一句興下四句、沼水決復入、於理亦通。然據集傳猶字・乃字、自是反興、當三句便止。四・五句另轉耳」(第壹冊、卷二、一一八頁)と言う。

(62) 『説約』鄭風「山有扶蘇」(第貳冊、卷八、四四二頁)。

(63) 朱熹『詩集傳』「詩序辨説」、三一頁。

(64) 顧夢麟は、朱熹『集傳』中のすべての内容が、みな詩篇中の文字と嚴密な對應關係にあるわけではないことに注意していた。朱熹が小雅「節南山」二章について行った注解中の句を取り上げて、顧夢麟は「而其所爲不善」という一句を補って注しているが、このような手法で詩篇を解釋することもまた許されるのである。かりにこれを詩篇の内容だと考えたならそれは間違ひである。以下、朱熹が句を補って注しているのはみな同様の手法である（注補而其所爲不善一句、豈不可以解詩。要以入詩非也。下凡朱註用補句者類然」と言う。これは朱熹が「節南山」二章の「憂心如惓」を解釋する直前に「而其所爲不善」という一句を記したのは詩篇の意味を解釋するために補充を行ったものであるが、それは詩句の内容には書かれていないことであるので、『集傳』の補句については注意して、通常の注解の句とは區別しなければならぬと言ふ（『說約』小雅「節南山」、第參冊、卷十四、一〇二四頁）。

(65) 詩篇のある字が押韻字であるか否かを顧夢麟が判斷する際は、朱熹の「叶韻」説を根據とする。

(66) 顧夢麟は『說約』の中にすでに孔穎達のこの發言を收録して注解としている。「詩の本質的な性格は、必ず韻によらなければならぬものである。かりに韻を踏まないものがあるとすれば、それは古人の韻が我々のそれとは合わないというだけのことである（詩之大體、必須依韻。其有乖者、古人之韻不協耳）」（『說約』周南「關雎」、第壹冊、卷一、一三三頁）。

(67) 『說約』秦風「駉」(第貳冊、卷八、五六三～五六四頁)。

(68) 『說約』秦風「駉」(第貳冊、卷八、五六四頁)。

(69) 『說約』「序」(第壹冊、七頁)。

(70) 顧夢麟は「關雎」を、朱熹の説に従って三章に分章する（毛傳・鄭箋・正義は五章に分章する）。

(71) 『說約』周南「關雎」(第壹冊、卷一、一九一～二〇頁)。

(72) 『說約』周南「關雎」(第壹冊、卷一、二〇頁)。

(73) 「詩章之體、皆以兩句爲一連、四句爲一截。前章興處、必至『求之』便止。下四句又深言其思之極也」（『說約』周南「關雎」、第壹冊、卷一、一九頁）。

(74) 『說約』周南「關雎」(第壹冊、卷一、十九頁)。

(75) 『說約』秦風「終南」(第貳冊、卷八、五八〇頁)。

(76) 同右。

(77) 「虛、起呂反、本與楚叶。又升虛、望楚平對。京、居良反、本與堂・桑・臧叶。而望楚與堂・景山與京亦平對。上以一項對一項、下以兩項對兩項、斷然不易也。降觀三句、自作一氣遞下。若必以望景觀卜作四下平對、而末句總承、如通解・講意

之説、牽彊不成話甚矣」(『説約』 酈風「定之方中」、第壹冊、卷四、二七三頁)。

(78) 『説約』「序」(第壹冊、十五～十六頁)。

(79) 「明成祖文皇帝御製序」(侯美珍等點校『點校補正經義考』卷二五六所收。臺北・中國文哲研究所籌備處、一九九七、第七冊、六二三頁)。

(80) 元代に出版された盧以緯の著した『語助』は、虚字に関する研究としては、中國最初の專書である。この書は泰定元年(一二三二)に初刻されたが、朱公遷の『疏義』はその序に據れば、至正七年(一三四七)の成立で、『語助』から隔たること約二十三年である。